

持続可能な農業と地域づくりに向けて ～「農」の担い手は誰か、新たなつながり・仕組みを考える～

吉良佳晃
丹波篠山 吉良農園

1. 「農業」と「農家」と「地域」

農業センサス 2020 において、基幹的農業従事者のうち 65 歳以上の占める割合は 69.6% と高齢化の一途である。一方で、経営面積を拡大している農業経営体が増加している。

農業現場では、圃場整備が行われており、大型機械による効率的な農作業が行える農地が集約されていく一方、自宅近くの圃場にて高齢者の方ができる範囲の農業を行っているという二極化が進んでいる。同じ農家と言っても、その取組みは大きく異なっている。そこで農業を「仕事としての農業」と「暮らしとしての農業」に分け、これからの農業の在り方を、実践を通じて考察してみたい。また評価基準として、仕事としての農業では、「利益を出すこと」、暮らしとしての農業では「生きがいを感じる」と定義する。

農業においては地域活動（集落の日役や祭り等）との関わりが深く、営農をスムーズに継続的に進めるように、水路整備、草刈り、獣がい対策、森林整備などの協働作業が多い。農家の高齢化、担い手不足は、生産活動だけでなく当たり前のようにある農村風景、伝統行事をも担っていることも忘れてはならない。

2. 新たな連携、仕組みが必要

農業には前述のように農作物生産以外に多くの要素が存在している。当事者にとってはこのような活動を通じての地域のつながり、合意形成の場となり、観光で訪れる方々にとっては、豊かな農村風景や生きものとの出会い、祭りを楽しむ機会の提供ということもある。

農業問題を生産効率向上、農産物の付加価値向上等という農業サイドによる取組みだけでは解決することが難しいのはここにある。生産効率を強調すると「文化・生きもの」が、伝統を協調すると「利益」が圧迫されがちになる。ここのバランスというより、新たな共創関係が求められる。

3. これまでの実践

新たな共創関係を築いていくために、就農してから現在に至るまでの実践を、営農環境や現場でのトライ&エラーを通じて紹介する。

(1) 篠山イノベーターズスクール

農業とは異なる分野との連携、発想による取組み、人財の広がり

(2) 都市部の学童保育との連携

保育分野との連携と課題

(3) 吉良農園の継業

農業経営のリアルと地域環境保全

一般社団法人 AZE（あぜ）設立

農家を支える、その環境を支える仕組みづくりが地域づくりへとつながる

「畦師～あぜし～」と「アジアの棚田」プロジェクト



写真：古市小学校裏の棚田再生活動

4. 課題とディスカッション

仕事としての農業も、暮らしとしての農業も、持続可能なものにしていくためには、土台となる地域づくりが必要であるとの結論に達し、新たな取組みをスタートさせている。

つながり、協働による「農」の担い手像とその持続可能な仕組みづくりを考察し、共に創り上げていくための議論を ESD の観点から行いさらなる実践、研究へと発展させていきたい。